みんなが大好きな本だから大切に使っていきたい

図書館　本のおなおし隊

児童書やベストセラー小説などを修理するボランティアの参加者

二人で始めたボランティア 人気の絵本ほど傷みひどく

市立図書館の本を修理するボランティアグループ「本のおなおし隊」は、平成23（2011）年6月30日、たった2人のメンバーで発足しました。

発起人の吉村（よしむら） 紀子（みちこ）さんと山田（やまだ） 昱子（いくこ）さんは、守山市図書館協議会の会員であり、もちろん本を読むのも大好き。地域で子どもたちに絵本や紙芝居の読み聞かせなどをするボランティアにも参加しています。しかし、守山の民話に関する紙芝居は破れていました。絵本もくたびれて製本の糸がほころびていました。本の汚れや傷みは勲章のようなもの。「かいけつゾロリ」のシリーズなど、子どもたちに人気の本や紙芝居ほど皆が触るので傷みます。

図書館司書が仕事の合間を見つけて、修理をしても手が回りきらず、新しく買い替える予算もないという事情がありました。協議会員としても、利用者としても図書館に親しんでいたので事情は理解していました。「それなら自分たちでできないかしら」と吉村さんと山田さんは図書館司書に相談して、修理の方法を教えてもらい「本のおなおし隊」の活動をはじめる事にしました。

吉村 紀子さん　山田 昱子さん

活動で気付いた意外な効果 きれいな本は大切にしてくれる

「修理した紙芝居は、7年経った今もあまり汚れたりしていないのです。きれいになった本や紙芝居は、次に借りる人も自然と大切に扱ってくれるのですね。ボランティアを通して改めて気付きました。図書館の常連で本が好きな私たちにとっては、とても嬉しい事で、活動の励みにもなりました」と吉村さんと山田さん。

本の修理にはハサミと専用のテープを使います。製本のほころびや破れの箇所を確認して、透明なテープで丁寧に修理していきます。言葉にすると単純そうですが、紙質や製本などによって直しやすい物も、直しにくい物もあります。作業の早さより、正確さと丁寧さが必要になり、1回の活動で修理できるのは一人5～6冊程度だそうです。吉村さんは「手先が器用なわけでも、根気があるわけでもないんです。本当は苦手な作業なのだけれど、本が好きだからできるんだと思います」と笑顔で話していました。

初参加の人に司書が修理の方法を教えています

本を通した出会いを楽しみに ボランティア常連さん増えた

本のおなおし隊の活動は毎月1回で、基本的に誰でも自由に参加できます。参加者は徐々に増えてきて、4月の活動日には14人のボランティアが集まりました。

常連さんも増えましたが「本を通して間接的に子どもたちと出会える気がする」「絵本との出会いが楽しい」「ここで会える人とのお喋（しゃべ）りや世間話が楽しみ」「手先を使うから脳トレになる」など参加理由はさまざま。ただ、本が好きという部分だけは共通なのだそうです。

新しい図書館になっても、大好きな本が、いつまでもきれいなまま利用者に読んでもらえるよう「本のおなおし隊」の活動は続いていきます。

本の汚れを丁寧に落とす参加者

はなしのタネ

The Garden City つなぐ、守山

＊緑の葉と水の雫をモチーフにした守山ブランドのロゴマークです。
小さな活動が種となって、大きく育つ「守山」をイメージしてタイトルをつくりました。

你好（ニーハオ）、児童図書「小犬の裁判はじめます」

児童文学者、今関（いまぜき） 信子（のぶこ）氏著の初版から31年を経て中国へ 市内在住の劉（りゅう） 穎（えい）氏翻訳の中国語版、市立図書館へ寄贈

右は「小犬の裁判はじめます」初版本。左は中国語版

1987（昭和62）年に出版され、全国青少年読書コンクールの課題図書にもなった児童図書「小犬の裁判はじめます」（市内在住児童文学者、今関 信子著）が、31年の時間を経て、中国語版に翻訳され（市内在住、劉 穎翻訳）、中国の北京華夏出版社から販売されています。この物語は、児童福祉施設の子どもたちが捨てられてしまいそうな命を助けるために、話し合い、飼い主を探す活動を通して大人との信頼を育てていくお話です。

翻訳をした劉 穎さんは、6年ほど前に著者の今関 信子さんとこの本に出会いました。実際に福祉施設を取材した内容をモデルに物語を創った事などを知り、中国の子どもたちにも読ませてあげたいと考えて翻訳・出版をしたそうです。中国語版の出版をきっかけに現代の子どもにも読んで欲しいと願い、中国語版を市立図書館や県立図書館に寄贈しました。中国の図書館にも寄贈する予定です。劉 穎さんは、「31年前の初版ですが、古い話は新しい何かを届けてくれると思う。国籍も世代も関係なく感動させてくれる物語だと思います」と話していました。

劉 穎さん　今関 信子さん